
整理整頓

月島 真昼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

整理整頓

【Nコード】

N0813L

【作者名】

月島 真昼

【あらすじ】

「き、汚い」僕の鞆を覗き込んだ彼女は表情を強張らせて仰け反った。綺麗好きだった彼女と僕のいろんな意味で痛いお話

クリアファイルというものが昔から苦手だった。

否、僕の部屋の惨状を鑑みるに整理整頓そのものが不得手なのだろう。

プリントの束をファイルに直すという一手間を惜しむが故にいつもくしゃくしゃになった白い紙が僕の学生鞆の底に蹲っていた。

しかしそれで問題はなかったのだ。僕の優れた探索能力と記憶力を駆使すれば約30秒以内には目的のプリントを発掘することができた。つまり常人よりも30秒速く動き出せばいい。ただそれだけの話だったのである。

そんな僕の前に彼女は現れた。

「き、汚い……」

信じられないモノを見た、とても言いたげに僕の鞆を覗き込むなり彼女は仰け反った。

4月の初め、僕が高校2年生になって少ししてのことだった。僕の鞆には整理が面倒になって放置していた1年の時のプリント類が未だに放り込まれたままだった。

彼女は僕のバックをひっくり返した。咂然とする。不要なプリントを全て分けて必要な分をトントンと軽く叩いて整える。

「ほら、捨てる！」

彼女は命令口調で言いながらプリントの山を指差した。なぜか僕は逆らうことができなかった。

彼女はそれから僕に付きまとい僕に注意し続ける。彼女は病的に綺麗好きだった。圧倒的に僕と対極だと思う。僕が前の授業のあとに出しっぱなしだった教科書とノートに顔を埋めて眠っていることさえ許しはしなかった。昼休みを挟んだ4限分の教科書とノートの量はなかなかいい枕だというのに。

肩を揺すられて起こされると僕は決まって不機嫌な顔をする。だけれど彼女の困った顔を見るとどうしても片付けざるを得なくなるのだ。

ちなみに学校の成績は僕のほうがよかった。テストの度に彼女は不満そうだった。

そんな不思議な関係は2年間、僕らが卒業するまで続いた。

僕はきつと彼女が好きになっていた。

けれど彼女は僕が好きではないことを知っていた。彼女には僕を見るよりもずっとキラキラとした目で追いつけている彼がいた。

僕は整理整頓ができるようになっていた。

大学に入って少ししてあった最初の同窓会には参加人数が2人欠けていた。僕は彼女がいないことを不思議に思った。誰もそのことには触れなかった。彼女の存在はなかったかのように扱われた。そんなはずはない。けれど僕は一先ず空気を讀んだ。

会が終わってから親しかった友達に訪ねた。

彼女は春休み中に死んだらしい。自殺したそうだ。

『汚れたから死にます』

というたった一文の遺書を残して。みんなは気を使って僕にだけは話さなかったらしい。

僕はようやく彼女が目で追いつけていた彼が同窓会の席にいなかったことに気づいた。

気持ちバラバラになって散らばった。

翌日に僕は大学を休んで連絡網から彼女の住所を探し当てた。彼女の家は住宅街にあるごく普通の一軒家だった。

「線香を上げさせてください」

僕が言うのと彼女の母親はどうぞ と軽く無愛想に言って玄関を開け放したまま家のなかへ戻って行った。不用心だと僕は思ったが盗られるモノなんて何も残っていないのかも知れない。

僕は玄関を閉めて彼女の母親の背中を追った。

和室に通されて彼女の母親は何も言わずに出ていった。仏壇に飾

られた写真の中の彼女は笑っていた。実感が沸かなかった。立ててある蠟燭は無視して置かれたライターで線香に直に火をつけた。立てて脇にあった金属の棒で椀に似た形の鐘を打つ。

チン　と澄んだ音がした。両手を合わせる。ようやく何かが浮かんできた。彼女の通夜を報せてくれなかった友人を少し恨んだりもした。

彼女の家を出て僕は友人を問い詰めた。自称情報通だった友人はよく知っていた。少し問われたぐらいで吐くなら通夜の人に教えて欲しかった。

彼女は“まわされた”そうだ。

彼と下級生に。

彼は3月の末が誕生日でギリギリ17歳だった。

法律的に子供とみなされた彼は満足な罰も受けなかった。

4年したが僕はついに恋人を作らなかった。

大学を卒業したときには取得した単位数は200を越えていた。

どうしていいのかわからなくてとりあえず知識を増やしてみた結果だった。ベストな解答を見つけようと努力した。院に進むんだろう？と訊かれて僕はいいえと答えた。僕は解答を見つけていた。

彼を見つけるのはそう難しくはなかった。というのも同窓会に彼が姿を表したからだ。高校の人脈というのは意外と長持ちするらしい。彼はほとんど完全に社会復帰を果たしていた。元々端整な顔立ちをしていた彼のスーツ姿は同性から見ても人目を惹いた。

なにをしにきたのか？

みんな彼をいぶかしんだ。彼は地面に頭を擦り付けた。泣きながらスイマセンでした。と言った。

それだけで帰って行った。

無論、僕の気持ちがあることで整理整頓できるはずがなかった。僕はトイレに行くと言って店を抜け出した。彼のあとをつける。

人気のない場所に行くまでつけるつもりだったが彼はなかなかそうした場所には行かなかった。

ついに彼の家の前まで来てしまつて僕は元来た道を引き返そうとした。

「おいっ」

彼が僕を呼び止めた。

なんのつもりだ？ と彼は言った。僕のことを覚えていないようだった。ただの不審者だと思つたようだ。僕は地味だったし無理もないだろう。

僕が近づいても彼に恐れた様子はなかった。少しは話そう。彼が本当に改心しているならこの4年間手放したことのない内ポケットのナイフを使う機会はないかもしれない。

一瞬でもそう思つた僕はバカだった。

来るなら来いよ。俺は人を殺したことがあるんだぜ？

ぷつん と頭の中でなにかが音を立てた。

洪水のように溢れてくる激昂。結局ナイフは使わなかった。僕は素手で彼を殴り殺した。自分の両手の皮膚が破れて血が噴き出して白い骨が覗いても手を止めることはしなかった。

それから僕は刑務所の中で暮らしている。

独房のなかで手紙を書くための紙を千切つては室内に散らし、彼女があの日のように「汚い」と顔をしかめながら声をかけてくれるのをずっと待ちながら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0813/>

整理整頓

2010年10月8日15時06分発行